

デ・レーケ と富山

明治24(1891)年7月、九州から山陰、北陸、信越、東北地方にかけて風水害をともなう大災害が発生した。富山県でも、7月19日に県下各河川が氾濫し、流失家屋30戸、浸水家屋7596戸、死者16人、用地流失1476haの被害が出た。特に、常願寺川流域は壊滅的であった。この復旧計画はその前年、内務省土木局長に就任した古市公威(ふるいちこうい)の指示で、デ・レーケが指導することになった。

同年8月6日、デ・レーケは、富山に到着。9月2日に石川県へ出て、黒部川、片貝川、上庄川、庄川、神通川各水系と伏木

港を視察している。この時、デ・レーケは、日本語・英語・オランダ語を話せる三女のコバ(13歳)を秘書兼通訳として連れて来ていた。

当時、県には工部大学校(現在の東京大学工学部の前身の一つ)第三期卒業生の工学士・高田雪太郎(たかたゆき)内務技師が、現在の土木部長に相当する役職で勤務していた。

高田は、熊本県生まれ。アメリカ人ジェーンズが英語で授業を行っていた熊本洋学校で学び、工部大学校を通じて英語で教育を受けており、デ・レーケとの会話や文章のやりとりで不自由はなかった。高田は、ノート85ページにぎっしりとデ・レーケの英文のメモを筆写していた。このノートと、高田の問い合わせに答えたと思われるデ・レーケの手紙などが熊本の高田の自宅で市川紀一(きいち)氏によって発見され、貴重な資料となっている。

高田の日記によると、デ・レーケは、8月14日、1858(安政5)年に発生した大地震によって崩壊した大鷲山・小鷲山の跡地を視察し、16日には常願寺川の源流ともなる立山登山をしている。

同年9月5日、3代知事・森山茂が上京。11月17日までの70日余りにわたり滞在し、国庫による補助と専門技術者の派遣を政府要人に陳情している。

同年(明治24年)11月30日、常願寺川改修計画を具体化して詳細な設計をするため、デ・レーケは再び富山を訪問(翌年1月26日まで)。この時に、上滝の上流側から工事が始まっている。高田はデ・レーケの事務所によく出かけ、一緒に工事区域を巡視したり、合口用水の取水口や新堤防の位置を決定したり、デ・レーケの指導を受けながら設計図面を作成した。⑧